

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K06695

研究課題名(和文) 地域外居住者による”通い型”空間管理とその協働的・交流的活動への展開

研究課題名(英文) Spatial Management of Commuting Vacant House Owner and its Possibility of Changing to Collaborative and Exchanging Activities

研究代表者

齋藤 雪彦 (SAITO, YUKIHIKO)

千葉大学・大学院園芸学研究科・准教授

研究者番号：80334481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：地域外に居住する他出住民の帰省行動から、関係人口としての可能性を分析した。その結果、月1回以上帰省、月1回以上空き家管理する他出住民は全体のそれぞれ約3割に上り、概ね耕作率も約2割前後に上る。また同時に約7割が積極的に余暇を過ごし、約3割は地域社会に積極的に参加する。南牧村では、住民と合わせた世帯数の約3割が他出住民で、耕作者の約1割、集落つきあい構成員の約2割を占め、地域社会持続に一定の役割を果たしていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地方創生等施策で交流人口、関係人口の増加が企図される中で、関係人口の中でも注目されてこなかった他出住民に着目し、彼らの帰省行動の地域社会持続に果たす役割を試行的に定量化した。その結果、彼らの果たす役割は、山間部の自治体においては小さくなく、彼らの帰省行動を支援、促進していくことを、地域社会持続に向けた一つの可能性として提言できた。政策支援のために、次期の科学研究ではより精緻な定量化を行うこととする。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the vacant house owner (VHO) as a member of society, 'related population', with the aim of clarifying the present understanding of (i) a vacant house, (ii) VHO activities, and (iii) VHO relationships with rural society. It clarifies that the following: (i) Most VHOs return to their home settlements on a regular basis, meaning more than once a year, with some visiting on a monthly or more frequent basis. And most VHOs return to undergo some association, with some visiting to undergo association actively, or private recreation actively for their joy. (ii) The VHO's relationship with rural society stipulates that VHOs have social impacts on population, spatial management, and social participation. Therefore, it has been predicted that they activate rural society and contribute to rural sustainability indirectly through these impacts.

研究分野：農村計画学

キーワード：関係人口 空き家管理 他出住民 通い住民 帰省行動 ソーシャルインパクト 中山間地域 地方創生

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

地方創生の方策として、地域活性化に際して、交流人口、関係人口の増加が求められているが、観光客や UIJ ターン(移住者)の役割や数は限定的であり、関係人口の在り方や役割の理論化が求められる。本編は、関係人口のうち、地域にルーツを持つ空き家管理者(他出子弟)を研究対象として、関係人口の増加や再定義を図ろうとするものである

2. 研究の目的

山間地域において、空き家管理の実態および空き家管理者の帰省行動を明らかにし、その地域社会への貢献を試行的に明らかにするものである。

3. 研究の方法

本編では特に空き家管理者を「通い住民」と捉えその帰省行動と社会的影響を考察する。群馬県西毛地域において、過疎高齢化が深刻な神流町、南牧村において自治体の空き家所有者へのアンケート、山間部におけるヒアリング調査を実施した。

神流町の空き家管理者 37 件のアンケート調査(神流一般)を中心に、神流町 128 件のヒアリング調査(神流山間)、南牧村 89 件のアンケート調査(南牧一般)、南牧村 100 件のヒアリング調査(南牧山間)の結果と適宜比較し分析を行う(、章では通い住民を年 1 回以上帰省と定義、章ではサンプル数の関係で年 1 回未満で帰省ありを含む、神流町アンケートは 37 サンプルのため誤差あり)。

4. 研究成果

(1). 帰省行動(神流山間、一般、南牧山間、一般集落)

空き家所有者で帰省頻度は4検体で「月1回以上」が約3割、「年1回未満」が山間部で約3割、一般で約2割となる。空き家管理頻度は、4検体で「月1回以上」が約3割、「年1回未満」が山間部で約5割、一般で約1割から2割である。通い住民のうち、神流一般以外は約 2 割前後の耕作率である。空き家年数は山間部で、「5年以内」が約2割、「20年超」が約4割だが、南牧一般は「5年以内」が約3割、「20年超」が約2割と山間が古い空き家が多い。

表1 帰省行動の比較(神流山間、一般、南牧山間、一般)

帰省頻度	「月1回以上」が約3割
空き家管理	「月1回以上」が約3割
耕作率	約2割前後(神流一般以外)
空き家となった年数	「5年以内」が約2-3割
	「20年超」南牧一般2割
	「20年超」山間で約4割

(2) 余暇とつきあい(神流町一般集落)

1) 余暇行動

山菜取り、住宅に泊まるくつろぐが約5割、釣り、農作業、山・大工仕事が約3割、散歩、山歩き、釣り、川遊びが約 2 割、BBQ、子どもと遊ぶが約 1 割であった。帰省する通い住民のうち、約 8 割は個人的余暇を過ごしており、約 7 割は 2 種以上の余暇を回答し、「積極的余暇層」と推定される(約 4 割は同時に住宅でくつろぐなど休憩的余暇を過ごす)。

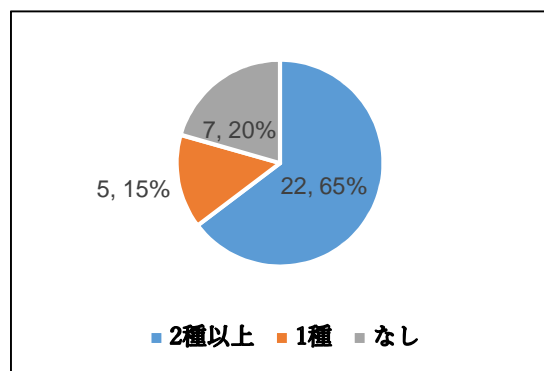
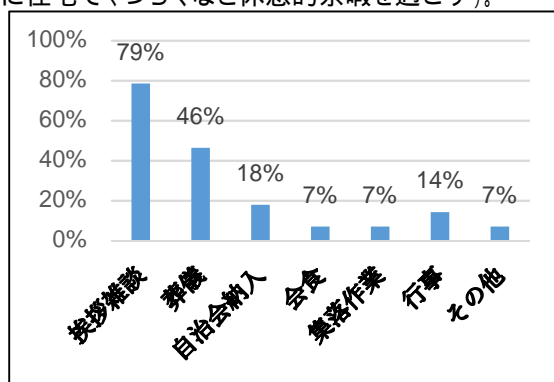


図1 余暇集計(神流町一般)

図2 余暇種類数(神流町一般)

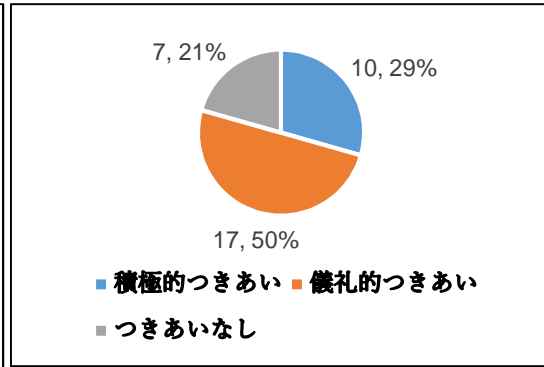
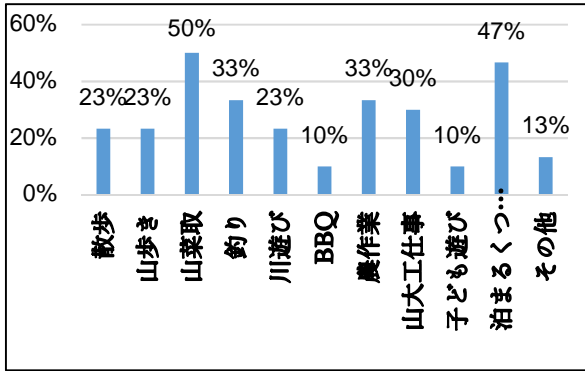


図3 集落つきあい集計(神流町一般)

図4 集落つきあいの種類(神流町一般)

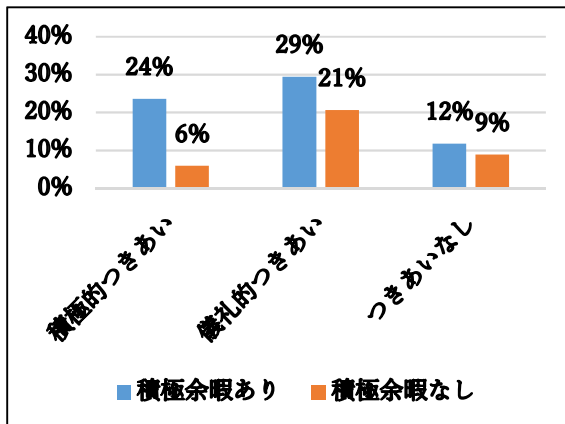
2) 集落つきあい

挨拶回り・訪問が約 8 割、葬儀が約 5 割、自治会費納入が約 2 割で、会食、集落作業参加、行事への参加がそれぞれ約 1 割であった。通い住民の約 3 割が会食、共同作業や行事への参加など積極的つきあいをし、約 5 割は挨拶回り、葬儀への参加など儀礼的つきあいを行う。つきあいがいない層は約 2 割いる。

3) 余暇と集落つきあい

余暇と集落つきあいの組み合わせで類型化を行うと、余暇もつきあいも積極的な「余暇・つきあい積極型」が約 2 割程度、余暇は積極的、つきあいは儀礼的な「余暇型」が約 3 割、積極的余暇はなく儀礼的な「儀礼型」が約 2 割、積極的な余暇の有無に関わらずつきあいのない「孤立型」が約 1 割見られた。

表2 ソーシャルインパクトの推計



ソーシャルインパクト項目	神流町	南牧村
通い世帯数/通い+住民	約1割	約3割
通い耕作/通い+住民	約4%	約9%
通いつきあい/通い+住民	約1割	約2割
通い積極つきあい/通い+住民	約3%	約8%

図5 余暇と集落つきあいからの類型化(神流町一般)

4) 帰省目的

帰省意識を見ると、義務感が約 6 割、楽しみ、自然と親しむ、交際を楽しむが約 5 割、懐かしさが約 4 割、趣味を楽しむが約 3 割、避暑、静けさ、一人の時間を楽しむもそれぞれ約 2 割に上る。また「主たる帰省目的」を見ると、墓参、財産管理が約 6 割であるが、つきあいのため、趣味のためが約 3 割、ゆっくり過ごす約 2 割、積極的財産管理、積極的つきあいもそれぞれ約 1 割ずつ見られた。

帰省目的から、義務的な帰省が約 6 割、積極的楽しみでの帰省が約 4 割であった。また帰省目的と余暇・つきあいの類型を関係を見ると、余暇つきあい積極型は積極的楽しみでの帰省、儀礼型、孤立型は義務的な帰省がほとんどであるが、余暇型では、義務的な帰省、積極的楽しみでの帰省が半々である。つまり、義務的な帰省のついでに余暇を楽しむタイプと余暇を目的に帰省するタイプに分かれる。さらに言えば余暇もつきあいも楽しみに帰省するタイプ、余暇を楽しみに帰省するタイプ、義務的な帰省と感じながら余暇を楽しむタイプ、儀礼的つきあいやつきあわず義務的な帰省に終始するタイプに分かれる。

(3) ソーシャルインパクト

(神流町一般、南牧村一般、山間の各集落)

神流町の世帯数は945世帯、通い住民の対象世帯は117世帯であったので、 $117/1062 (= 945+117) = 0.11$ と約1割を通い住民が占める(南牧村では約3割程度)。管理されている家屋は $117*0.78 = 約91$ 戸であり、 $91/1036 (= 945+91) = 0.087$ と約1割弱を通い住民が管理する(南牧村ではそれぞれ約3割を占める)

通い住民耕作者は、 $117*0.78*0.38 = 約35$ 件、住民の耕作者は $945*0.8 = 756$ 件と推定 $35/791 (= 35+756) = 0.044$ と約4%程度を占める(南牧村では約9%)

またなんらかのつきあいを行う世帯は、通い住民が $117*0.78*0.79 = 72$ 件、住民 945世帯なので、 $72/1017 (= 72+945) = 0.07$ と約1割弱を通い住民が占める(南牧村では集計方法が異なるが約2割)

積極的つきあいを行う世帯は、通い住民が $117*0.78*0.29 = 約26$ 件、住民は $945*0.9 = 851$ 件と推定され、 $26/877 (= 26 + 851) = 0.03$ で約3%程度と推計される(南牧村では集計方法が異なるが約7.5%程度)

(4) おわりに

帰省する通い住民の約7割は積極的に余暇を過ごし、約3割が積極的に地域社会参加をすることが分かる。

また、帰省する通い住民のうち約4割程度は余暇や集落つきあいを楽しみに帰省し、約2割弱はつきあいの維持や財産管理のために帰省するついでに余暇を楽しむ。前者により地域社会維持に関わってもらう工夫(イベント、居場所づくり等)、前者、後者を含めた帰省行動の支援が、地域社会維持につながると期待される。

過疎化、空き家化が深刻な南牧村では通い住民の割合が高いが、神流町でも人口の約1割(南牧3割)、管理される家屋の約1割弱(南牧3割)、耕作者の約5%弱(南牧約1割弱)、地域社会への参加者の約1割弱(南牧約2割)を通い住民が占めると推計する。神流町では空間管理や地域社会参加という点で、通い住民の全体の数%程度の貢献(南牧では約1割2割)が分かる。両町において、「通い住民人口比」の1/3が「通い住民耕作者比」となり、2/3が「通い住民つきあい比」となる。今後、活動の頻度数などで精緻な定量化を進め、親が在住し、生活支援する子世帯を含め、通い住民として分析対象とする。

(5) 参考データ(南牧村単独での分析結果)

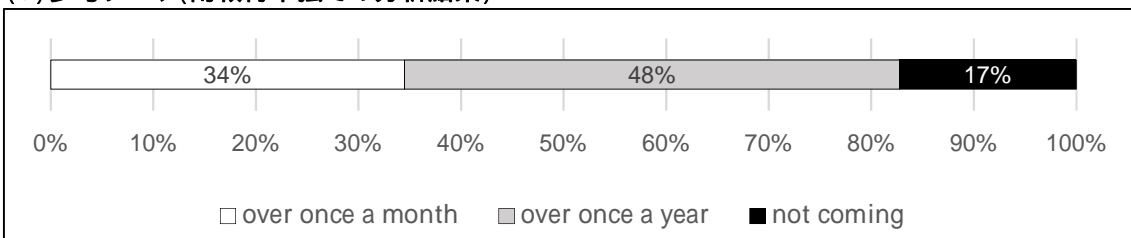


図6 帰省頻度(南牧一般)

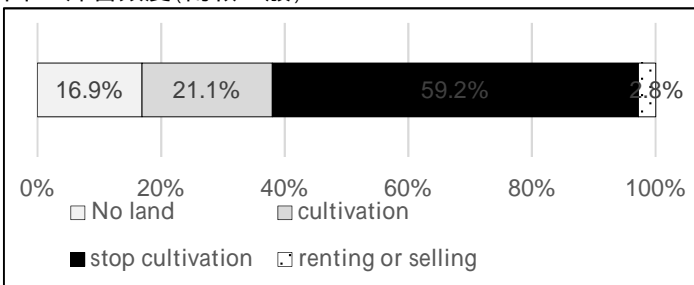


図7 耕作頻度(南牧一般)

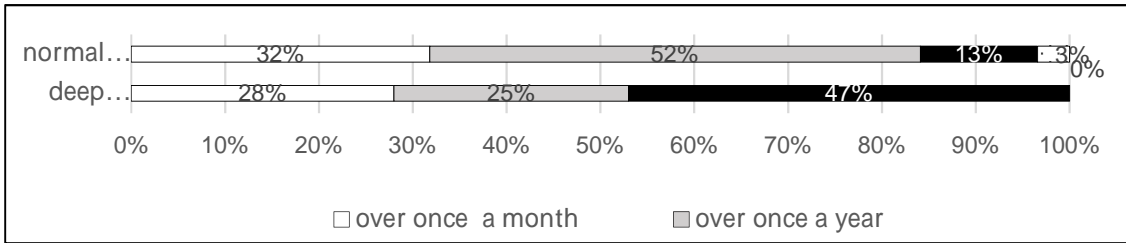


図8 空き家管理頻度(南牧一般、山間)

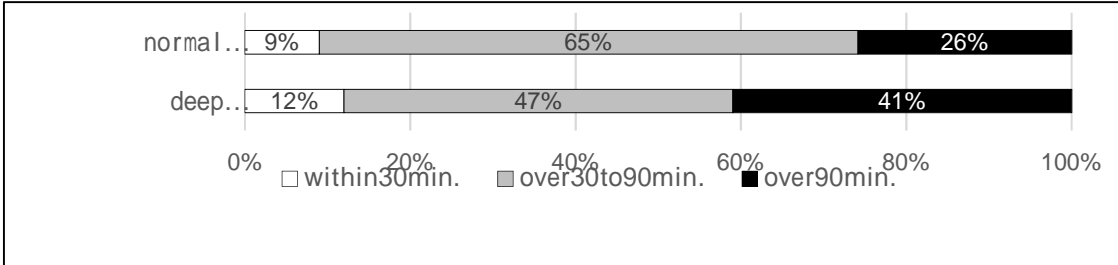


図9 空き家管理者住所から集落までの時間距離(南牧一般、山間)

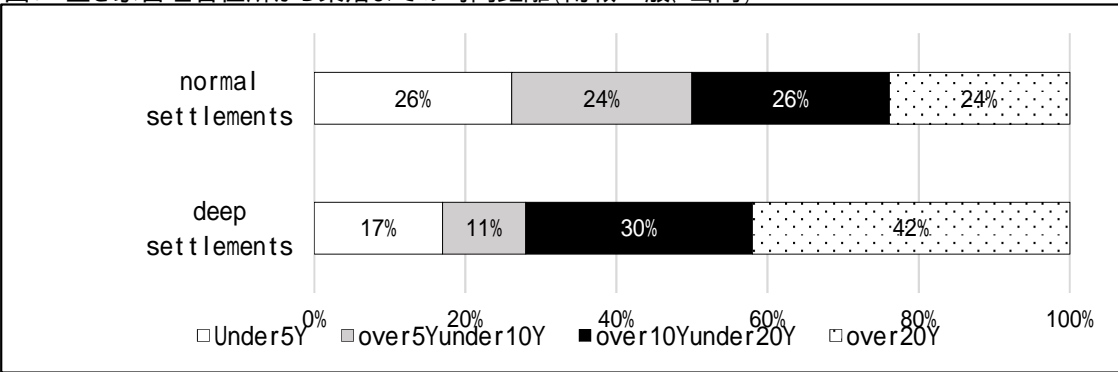


図10 空き家になってからの年数(南牧一般、山間)

表3 ソーシャルインパクト積算の根拠(南牧一般、山間)

No.	Definition	Remote settlements	Normal settlements	Whole village
1	Residents households(parameter)	53[①]	935[①]	988[②]
2	VHO households(parameter)	103[②]	393[②]	496
3	VHO ratio(VHO /VHO+residents)	②/(①+②) (66.0%) [③]	②/(①+②) (29.6%) [③]	-
4	CVHO /VHO(original data of Figure8)	(26+49)/100 (75.0%) [④]	(30+42)/87 (82.8%) [④]	-
5	CVHO ratio(CVHO /CVHO+residents)	a/(a+①) {if:a=②*④} (59.3%)	e/(e+①) {if:e=②*④} (25.8%)	(a+e)/(a+e+②) (29.0%)
6	High-frequency CVHO /VHO (original data of Figure8)	26/100(26%) [⑤]	30/87(34.5%) [⑤]	
7	High-frequency CVHO ratio(high-frequency CVHO /high-frequency CVHO+residents)	b/(b+①) {if:b=②*⑤} (33.6%)	f/(f+①) {if:f=②*⑤} (12.7%)	(b+f)/(b+f+②) (14.1%)
8	Building keeper VHO /VHO (original data of Figure9)	(28+25)/100 (53.0%) [⑥]	(28+46)/88 (84.1%) [⑥]	-
9	Building keeper VHO ratio(building keeper VHO /all building keepers)	c/(c+①) {if:c=②*⑥} (50.7%)	g/(g+①) {if:g=②*⑥} (26.1%)	(c+g)/(c+g+②) (28.0%)
10	CVHO cultivator /CVHO (original data of Figure10)	12/75(16.0%) [⑦]	15/71 (21.1%) [⑦]	-
11	Residents cultivator / residents (original data)	41/51(80.4%) [⑧]	same as deep *1 (80.4%) [⑧]	-
12	CVHO cultivation ratio(VHO cultivator /All cultivators)	d/(d+①*⑧) {if:d=a*⑦} (22.5%)	f/(f+①*⑧) {if:f=b*⑦} (8.4%)	(d+f)/(d+f+②*⑧) (9.3%)
13	CVHO associated obligatorily /VHO (original data of Figure 11)	-	49/71 (69.0%) [⑨]	-
14	CVHO ratio of obligatory association(CVHO associated obligatorily /all associated obligatorily)	-	e*⑨/(e*⑨+①) (19.4%)	-
15	CVHO associated actively / VHO (original data of Figure 11)	-	15/71 (21.1%) [⑩]	-
16	CVHO ratio of active association(CVHO associated actively / all associated actively)	-	(e*⑩)/(e*⑩+①)*0.9 (7.5%)	-

#:Data of the remote settlements and the normal settlements are not dependent on the chi-square test

*1: Assuming the normal settlements percentage is the same as that of the remote settlements.

*2: Assuming all residents associate obligatorily.*3: Assuming 90% of residents associate actively

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 齋藤雪彦	4. 巻 農村計画
2. 論文標題 群馬県南牧村における空き家の管理 地域空間（空き家・農地・墓）を活	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会2018年大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 81-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤雪彦・成雨蒙・李卓林	4. 巻 農村計画部門
2. 論文標題 所有者不在空間（空き家、農地、墓）を活用した交流人口のネットワーク化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会2018年大会パネルディスカッション資料、『ターン』と地域組織・地域再生のこれから	6. 最初と最後の頁 45-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 成雨蒙・齋藤雪彦・李卓林	4. 巻 農村計画部門
2. 論文標題 中山間地域における空き家と農地の管理	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会2018年大会パネルディスカッション資料、『ターン』と地域組織・地域再生のこれから	6. 最初と最後の頁 47-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤雪彦	4. 巻 農村計画部門
2. 論文標題 群馬県南牧村における空き家の管理	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 81-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 セイウモウ、齋藤雪彦、ワンエンセイ、ナンホン	4. 巻 農村計画部門
2. 論文標題 中山間地域における空き家所有者の来訪行動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 51-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ワンエンセイ、齋藤雪彦、ナンホン、セイウモウ	4. 巻 農村計画部門
2. 論文標題 山間地域における高齢者の外出行動に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 111-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ナンホン、齋藤雪彦、ワンエンセイ、セイウモウ	4. 巻 農村計画部門
2. 論文標題 Comparative Study about Depopulation Stages of the Settlements in the Mountainous Area	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 113-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤雪彦、ワンエンセイ、ナンホン、セイウモウ	4. 巻 農村計画部門
2. 論文標題 中山間地域における他住民の地域社会への参画に関する考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 149-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 YUKIHIKO SAITO
2. 発表標題 Could related residents save rural areas in Japan?
3. 学会等名 European society of Rural Sociology Congress 2019 in Trondheim (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----